美しい運河のまちオランダから、ようこそ水郷・越谷へ。住まい・まちづくりを通じて、国際交流の３日間。

平成25年10月に協調会・NPOの有志によるオランダ視察を敢行した際に、オランダの方々には、たいへんお世話になりました。その縁もあり、今回はファン・デル・フェルデン氏をお招きし講師をお願いしました。

３日間の越谷滞在の間、市役所表敬訪問・会員事業所訪問、住宅展示場やレイクタウン・西大袋など再開発エリアの視察等々、多忙なスケジュールの合間を縫って、お茶会や神社参拝、和食を堪能するなど日本文化に触れていただいたり、常に住まい・まちづくりを共通のテーマとして一緒にまちあるきも楽しみました。

私たちには見慣れた風景が、オランダ人から見ると…？

市内各所の散策では、カメラを持って歩き、ファン・デル・フェルデン氏が美しいとか良い風景だと思う所や、逆に変だとか不思議だと思う所を写真に切り取っていただくことにしました。アーバンデザイナーである彼の写真を見ると、景観の一要素として「人」が、上手に構図の中に収まっています。また、絵や図を用いた説明というのも、デザイナーならではです。街を歩いていたら、急に傘を用いて考えを説明したり、レストランではナプキンに図を描いて、話したりします。

公園の価値や使われ方、道路の舗装や電柱の地中化についてのコスト意識の差、安全に対する公共の責任と自己責任、特に水辺のフェンスの必要性など、新鮮なキーワードがたくさんありました。国民性や文化の違いを超えて、市民一人ひとりの求めるものは良好な住環境であり、同じ視点で見ることができるようです。

Topics

■埼玉県の助成を受けて「街なか居住推進事業」

NPO法人越谷市住まい・まちづくりセンターは、平成28年度埼玉県NPO活動促進助成事業（ネーミング事業：住まいるまちづくり支援事業）の採択を受け、今年度6月～2月「景観まちづくりによる街なか居住推進の拠点づくり事業」を実施します。具体的には、越谷市中心市街地において保存・再生された「蔵」を拠点として、

- 離接する景観協定地区（ことのは越ケ谷）の運営の支援
- 周辺地区の空き家、空き地、空き店舗の有効活用
- 蔵カフェ（コミュニティカフェ）の開設　などの事業を行います。

■越谷市住まい・まちづくり大学2016（第5期生）

今年度は「緑を生かした景観まちづくり」をテーマに、10/1（土）～12/3（土）の開講です。今年度、越谷市緑の基本計画が改訂されたことを受け、暮らしの中にある「みどり」を再考し、さらに住宅地におけるみどりの保全・維持管理についても学びます。

■市議会超党派による「空き家対策に関する勉強会」を開催

越谷市住まい・まちづくり協議会は、市議会超党派による勉強会の設置を提案しました。現在の空き家条例を見直し、空き家問題を単に所有者個人のものと捉えるのではなく、外部不経済による弊害の解消、居住福祉の推進、景観の整備、安心・安全のまちづくりまで幅広く活用できる越谷市空き家等対策総合計画を策定し空き家条例を強化することを目的に、越谷市市議会議員、関連する行政職員、当団体会員の参加のもと、本年7月に、空き家活用に関する現状報告から開始しました。今後、現状の「空き家等の適正管理に関する条例」に対する行政の対応と課題、空き家等対策協議会の設立について、メンバー構成・役割等の意見交換等を予定しています。

※当団体の活動予定や事業報告などは、メールマガジンやホームページで紹介しています。　詳しくは、http://www.koshi-machi.com/
または「越谷市住まい・まちづくり協議会」で検索してください。

2016 SUMMER 《増刊号》 Koshi-machi news Vol.6

【越谷市住まい・まちづくり協議会】ニュース 第6号……平成28年8月

こし-まち だより

■編集・発行　越谷市住まい・まちづくり協議会　■事務局　埼玉県越谷市宮本町2-185-12　TEL.048-965-5358　FAX.048-966-7066

越谷市街づくり協調会　創立30周年記念事業「越谷のこれからの30年」を考える。

特集号

市民主導や地方主権、景観配慮などのまちづくり先進国・オランダからロブ・ファン・デル・フェルデン氏を招聘、「オランダのまちづくり～自治体と事業者・専門家の関係と役割、その責任」と題して講演会を開催しました。

行政、事業者、そして市民と協働へ 30周年を迎えた越谷市街づくり協調会

越谷市街づくり協調会（以下「協調会」という）は、市内の住宅関連事業者による団体で、昭和61年4月に開発指導要綱の運用に関する勉強会から発足しました。以来、官民相互の理解・交流、会員間の懇親及び情報交換など、社会情勢に対応して役割を変化させながらも、一貫して官民協力したまちづくりの推進を目指してきました。その後、まちづくりは行政と事業者だけでなく、市民と協働する時代へと変遷し、平成24年6月には、協調会が設立母体となってNPO法人越谷市住まい・まちづくりセンター（以下「NPO」という）が活動を開始しました。

本年4月、協調会は創立30周年を迎え、この節目に「越谷市住まい・まちづくり協議会」の構成団体として正式に加入するとともに、NPOが協調会の事務局を担当。それまで事務局を務めていた越谷市商工会は本年4月に越谷商工会議所となり、各々の組織再編成を機に、今後もまちづくり分野でますます連携を深めていくことになりました。

30周年記念事業は、まちづくりのビジョンを描くための学びの機会に

我が国は少子高齢人口減少社会が本格化し、産業のみならず都市や自治体さえも淘汰される時代を迎えています。昨年4月中核市に移行した越谷市の人口は現在微増を続けていますが、5年後の2021年に約34万人をピークに減少に転ずると想定されています。今後、名実ともに埼玉県東南部における中心都市として評価を得るためには、安全・安心・快適で魅力あるまちづくりのためのビジョンが不可欠です。

記念事業の企画にあたり、景観や環境配慮の都市計画や住宅計画、歩行者に優しいまちづくりや交通システム、市民主体のまちづくりを自治体・事業者・市民それぞれの立場で学び実践していくため、まちづくり先進国オランダに学ぼうと考えました。オランダは平坦な地形や水辺環境が越谷と似ていることもあります。また、市民社会が成熟し、

行政と事業者、専門家が共にまちの質に対して責任を分担し、協働で実践していることから、アーバンデザイナーのファン・デル・フェルデン氏を講師に招き、オランダのまちづくりについて話していただくことにしました。

当日は市職員や事業者や市民団体など合計123名が参加し、熱心に聴講、意見交換を行いました。

- ■日時：平成28年5月13日16：00～18：00
- ■場所：越谷サンシティ4階　桐の間
- ■主催：越谷市まちづくり協調会、NPO法人越谷市住まい・まちづくりセンター
- ■後援：越谷市
- ■講師：ロブ・ファン・デル・フェルデン（Rob vav der Velden）オランダアーバンプランナー・デザイナー協会会長、アトリエダッチ代表

1960年代 ボンエルフ発祥の地

1953年 世界最初の歩行者天国

アーバンデザイナー：ロブ・ファン・デル・フェルデン氏の講演により、参加者はこれまでのまちづくりの取組を見直し、越谷市、事業者、市民、それぞれの役割や責任を考えました。最終的には「越谷のこれからの30年」を見据え、協働で「住みたいまちNo.1」を目指します。

■第一部は講演 「オランダのまちづくり～実例紹介とともに語るオランダの都市計画・デザイン」

行政のリーダーシップにおいて、都市計画から都市デザインの領域までのまちづくりが行われるオランダ。アーバンデザイナーであるファン・デル・フェルデン氏による講演では、自治体と事業者、都市計画家や建築家のような専門家がどのような立場で、どのような役割分担をもって、まちづくりに取り組んでいるのかを実例とともに紹介していただきました。

■第二部は意見交換「越谷のこれからの30年～オランダ人の見た越谷」

ファン・デル・フェルデン氏が、越谷の街を見て、何を感じ、何を考えたのかを探ります。事前にまちあるきを行い、オランダ人の視点から越谷の興味深いところやおかしなところ、不思議なところなどを撮影してもらい、その写真について理由説明を受け、越谷市職員や事業者に回答をしていただき、意見交換を行いました。

■講演会後は懇親会

懇親会は、越谷サンシティ「楓の間」に会場を移し約3時間。ファン・デル・フェルデン、ルーカス夫妻の3日間の滞在、講演、そして長旅の労をねぎらい、おもてなしの時間を設けました。南越谷名物阿波踊りは、参加メンバーによる即席連も登場し、越谷最後の夜を和やかに賑やかに過ごしていただきました。

事業の趣旨

越谷市街づくり協調会は、30周年を機に活動の理念を改訂しました。「住んでみたい街 No.1」をめざし、活力と魅力のある街づくりを推進し、誇りの持てるわがまち「ふるさと越谷」を、22世紀を生きる子どもたちへ残し伝えます。

高度経済成長期以来、東京のベッドタウンとして発展してきた越谷市において、住宅産業は、まちづくりの一端を確実に担ってきました。当会発足当時、業界のモラルを高め行政との相互理解を深めるという目的から、土地神話・バブル崩壊を経て、会員間の懇親及び情報交換や勉強の場へと役割は変化してきました。さらにはひたすら開発・建設を推進する時代が終焉し、環境や景観に配慮したまちづくりを、市民・行政・事業者の三者協働で推進するという概念が定着した現在、会員各社が社会的責任（CSR）を担うと同時に、当会の存在意義・理念を見直すべき時機を迎えました。

これからの30年を考えると、越谷市のような首都圏近郊都市において、住宅政策は最も大切です。また、魅力ある住宅都市を実現するためには時間がかかります。今から、長期ビジョンを策定し着実に実行していくために、これからの30年を見据えたテーマを「住まい・まちづくり担い手の育成」としました。具体的には「住まい・まちづくり視察制度の創設」、「小中学校への住まい・まちづくり出前講座の実施」、「官民人事交流事業」などを推進していく予定です。

主催者　越谷市街づくり協調会　会長　若色欣爾

（趣旨説明より抜粋）

参加者の声

今後のまちづくり、参加者一人ひとりに響いた成果は…？

講演会の感想の上位を占めたのは、「フェンス・安全・水辺・公園」「越谷市の評価」「Why How What」「考え方・意識・国民性・文化度の違い」「歩行者優先・歩車分離」でした。

参加者アンケートの「印象に残った事・感想」から、いくつか抜粋して紹介します。

- オランダの水辺のまちづくり。オランダでも水の事故について、行政の責任はあるということ。（50代・男性・公務員）
- まちのデザインを依頼されたら、そのまちの歴史から学ぶ。（50代・男性・公務員）
- Why→how→whatの考え方が新鮮であり、参考になりました。（50代・公務員）
- 「歩行者のための空間」を考えるべきという言葉にハッとしました。そういう目線で景観を考えたことがなかった。（20代・女性・会社員）
- 外国の方が講演すると外国の話ばかりですが、今回はそこから越谷を実際に歩いてもらい、話してもらえるというのがわかりやすく、良かった。（20代・女性・会社員）
- オランダと日本の安全性の感覚の違いについて。日本は安全を第一に、景観や歩行者に対する配慮が足りない。オランダは、安全は当然のことながら、景観を利用者に対してもデザインしていること。（20代・男性・会社員）
- オランダの水辺にはフェンス等はほとんどなく、ゆるやかな勾配をもって安全を確保している点。また、水辺の事故については子どもの教育で発生率が少なくなっているという点。（20代・男性・会社員）
- 縦割りから、官民が共につくりあげることが大切だと感じました。車より人（歩行者）を中心に考えることも学びました。（30代・男性・会社員）
- オランダの道路でアスファルトが少ないのはレンガをかためずに施工して安く交換できる側面もある。（30代・男性・会社員）